

奈良県教育振興大綱基本理念	育人 ～県民一人一人が学び、育ち合い、潜在力を最大限引き出す～		総合評価
教育目標	豊かな潜在能力を開花させ、知の創造を高め、豊かな感性を磨く。		
学校経営方針	進路第一希望の実現、人間力の向上		
昨年度の成果と課題	平成30年度本校教育のキーワード	具体的目標	A
<p>アクティブ・ラーニングを軸とした授業改善の取組、生徒会を中心とした生徒の主体的な活動、特別な支援を必要とする生徒への細やかな対応、地域との連携をはじめ、学校教育全般において所期の目標を達成することができ、学校評議員会においても評価をいただいた。</p> <p>課題としては、進路指導・キャリア教育に関わって、自らの進路を切り開いていくという意欲と実践力を高めること、大学入試制度改革に向けた準備を進めることがあげられる。また、本校が避難所となっていることを踏まえ、地域との連携の一層の強化も必要となる。</p> <p>こうした取組をはじめ、日々の生徒の活動全般を通して、橿原高校の特色を鮮明にしていく必要がある。</p>	<h1>意欲 敬愛 参画</h1>	意気高く大きな夢をもつ生徒に育てる。	
		自らの限界に挑戦する生徒に育てる。	
		夢の実現に向け邁進する生徒に育てる。	
		挨拶の励行等を通じ、さわやかな校風を醸成する。	
		「人権教育推進プラン」を踏まえた教育を推進し、互いを大切にする人間関係を育む。	
		郷土の歴史を知り、郷土への誇りと愛着をもつ生徒に育てる。	
		現代社会への関心と課題解決への意欲をもつ生徒に育てる。	
社会の一員として主体的に関わろうとする生徒に育てる。			
次の社会や文化を担う気概と力量をもつ生徒に育てる。			

	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
(1) 学校運営	意欲を持って学校生活に取り組む生徒を育てる。	<p>新学習指導要領への対応を見据えながら、各教員がアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業を行うことにより、生徒一人ひとりの意欲・関心を引き出す。</p> <p>また、総合的な学習の時間をはじめとして参加体験型学習を通して、キャリア教育の視点も踏まえながら個々の課題解決に向けて主体的に活動できるよう、サポートする。</p> <p>授業アンケートにおいて「受け身でなく能動的に授業に取り組んでいる」の項目が、12月の調査で55%以上であればA、45%未満であればC。</p> <p>橿高生活アンケートにおいて「部活動と勉強についての達成感」の平均値が、5ポイント以上あればA、4ポイント未満であればC。</p>	A	<p>本年度は、本校がキャリア教育の優良校に選出され、文部科学大臣表彰を受けた。本校の行ってきたキャリア教育に関し、一定の評価がなされたものとする。</p> <p>授業アンケートにおいて「受け身でなく能動的に授業に取り組んでいる」の項目が、7月の調査では55.4%、12月の調査で58.8%と増加した。ただ、能動的に取り組んでいるという回答にはばつきがあり、教員によりアクティブ・ラーニングへの取り組みに温度差が見られることが課題であるとする。</p>	<p>文部科学省が「アクティブ・ラーニング」を「主体的・対話的で深い学び」と言い換え、アクティブ・ラーニングの姿が少しだけわかりやすくなった。これを機に、再度、新しい学習要領の考え方を教職員間で共有することにより、変革を促したい。</p> <p>生徒がいきいきと取り組むためには、指導する教師が元気でなくてはならない。働き方改革・改正労働法の施行を追い風に、行事・教授方法の見直し等業務のあり方を見直すことで、教職員の負担軽減と疲労回復を促したい。</p>	<p>学校運営全般にわたり先生方の取り組みを多とした。</p> <p>高い評価結果は先生方の努力の結果である。評価結果、分析等に異議はない。</p> <p>研修の成果を全教職員にフィードバックし、互いに共有することは重要で、そのための方策を立てる必要があると考える。</p>
	「学び続ける教員」としての自覚と実践を促すための研修を推進する。	<p>教職員が教育研究所等の研修会や教科等の研究会に積極的に参加し、その研修の成果を教職員間で共有できる状況をつくる。</p> <p>校内研修においては、今日的な課題をテーマとした研修を実施する。</p>	B	<p>全教員が、研修会や研究会に数多く参加した。しかしながら、その成果を校内で共有する状況がなかなか創出できなかったと感じる。</p>	<p>教員が多くの仕事を抱える中で、一堂に会する時間がなかなかとりにくい状況は改善不可能である。グループウェアをはじめ、ITを活用するなど、別の方法を模索したい。</p>	
(2) 学習指導	時間の有効活用と授業における集中度を高める魅力ある授業を展開する。	<p>部活動と学習のけじめを意識的につけさせ、限りある時間を有効活用させる。生徒の授業アンケートにおいて、「集中して授業に取り組んでいる」と答えた生徒の割合が80%以上でA、60%以下でC。</p>	A	<p>授業アンケートにおいて、「集中して授業に取り組んでいる」と答えた生徒の割合は80.9%であった。生徒は概ね授業に集中して取り組んでいるが、授業内容を十分理解できず、集中できていない生徒が全くいないとはいえない現状である。</p>	<p>調査等で不振だった生徒に対して、積極的に補充を行い、クラス全体の学力の底上げを図っていかねばならない。</p>	<p>家庭学習の意義をしっかりと定着させるためには、これまで以上にありがちな精神論ではなく、データを示して説得力を持たせることが必要と考える。今後の研究に期待したい。</p>
	家庭学習を促進する。（平日の家庭学習時間1時間未満の生徒を減らす）	<p>学校での授業を大切にさせるとともに、家庭学習の重要性を認識させ、「予習→授業→復習」の学習サイクルを定着させる。平日の家庭学習時間が1時間未満の生徒が15%以下であればA、30%以上でC。</p>	C	<p>平日の家庭学習時間0分が9.8%、30分未満が13.7%、1時間未満が19.0%で家庭学習の不足している生徒が多く見られる。逆に4時間以上は12.8%であった。</p>	<p>日々の学習においては課題や小テストを工夫して積極的に実施していかねばならない。</p> <p>生徒自ら主体的に学習に取り組むことが、将来の進路実現に繋がることを繰り返し伝達し、学習意欲を喚起していく必要がある。</p>	
(3) 生徒指導 教育相談 生徒会活動	生徒の基本的な生活習慣を確立させることから、克己の精神を育む。	<p>生徒の遅刻回数の減少に努める。年間遅刻回数を昨年度比3ポイント以上の減でA、1ポイント以上の増でC。</p>	B	<p>「授業を大切にする」ことを繰り返し生徒に説諭することによって、遅刻の回数も大きく増えることはなかった。</p> <p>さらに欠席・遅刻を減らすことを目標としていきたい。</p>	<p>「あいさつ運動」や「声かけ」を活性化させ、生徒の学校生活への満足度を高める。</p>	<p>地域との共働活動が活発であることを評価する。今までの積み重ねがある分、単に前例踏襲となっていないか検証し、新しいものを生み出すことが必要になってくるのではないかと考える。</p> <p>地元小学生と通学時間が重なるので、通学マナー向上にいつそう留意願いたい。</p>
	地域や学校での行事等に、企画段階から生徒会や生徒会各種委員会を参加させ、主体的に学校生活に取り組むとともに、社会貢献に努める姿勢を醸成する。	<p>保護者アンケートで「学校の雰囲気がよく、生き生きとしている」と答えた割合が昨年度比3ポイント以上の増でA、5ポイント以上の減でC。</p>	B	<p>文化祭や地域での地域の活動に意欲的に参加し、好評を博している。また、地域交流の行事も定着してきて、円滑な連携を図ることができるようになってきた。</p> <p>その反面、生徒の中にはマンネリ感があるのか、数値的にはやや低下した結果となった。</p>	<p>各種行事を見直して、新しい方法を模索する。</p> <p>生徒発信の行事をできるだけ増やし、生徒会や各種委員会の活性化を図る。</p>	

(4) 進路指導 キャリア教育	生徒の進路第一希望の実現を図る。	各教科の授業、総合的な学習の時間、特別活動等を通して、生徒の主体的に物事に取り組む姿勢と学力の向上を図り、進路第一希望の実現を目指す。 進路実現に関する卒業時アンケートで、3年生生徒の進路決定先満足度が50%以上且つ学校の進路指導に対する3年生保護者の満足度が80%以上でA、生徒の満足度が40%以下且つ保護者の満足度が70%以下でC。	B	3年生の卒業時アンケートで47.4%の生徒が進路決定先に「大いに満足している」と回答し、3年生保護者アンケートでは89.9%の保護者が本校の進路指導に「満足している」と回答した。 進路だより“Will”を発行(1・2年5回、3年7回)した。内4回は考査成績郵送と三者面談に合わせて発行し、保護者に対する情報提供に努めた。 進路情報誌を配布し、生徒・保護者に最新の進路情報を提供した。 校外実力テストを計画的に実施した。特に1・2年は全員が学校で受験できるよう体制を整えた。 充実講座(3年4月開始、2年10月開始)を計画どおり実施したが、3年の2学期以降の受講数が年々減少している。	進路だより“Will”及び進路情報誌により、高大接続改革や進路全般に関わる最新情報を、生徒・保護者に提供する。 LHR、総合学習、SHR等において、進路情報誌の活用方法を周知する。 校外実力テストの返却方法を工夫する(学期によって三者面談で返却する等) 現3年生の充実講座に関するアンケート結果を参考に、特に3年2学期以降の充実講座の実施方法(内容・レベル・時間等)を見直す。	GTECへの全員受験や探究の時間の学習計画などから、すでに大学入学共通テスト(新テスト)に対する対策、取り組みが進められていることについて、理解した。 キャリアデザインの設計のためにも、1年生ではここまで、2年生ではここまで、3年生においてはここまでという具体的な目標を提示して、意識醸成をはかることがいいのではないかと。 進路第1希望実現に向けて一層の取り組みに期待したい。
	キャリア教育を促進する。	各教科の授業、総合的な学習の時間、特別活動に加え、進路講演会の開催や進路情報の提供、インターンシップ等の体験的な学び等を通してキャリア教育を推進し、主体的に自己実現を図る姿勢を育てる。 キャリア教育・進路情報に関する卒業時アンケートで、3年生生徒の満足度が50%以上且つ3年生保護者の満足度が80%以上でA、生徒の満足度が40%以下且つ保護者の満足度が70%以下でC。	A	本校のキャリア教育・進路情報の提供について、3年生の卒業時アンケートでは77.9%の生徒が、3年生保護者アンケートでは84.0%の保護者が「満足している」と回答した。 未来探求とLHRにおいて進路学習を実施したが、特に1・2年の回数・内容を見直す必要がある。 生徒対象進路講演会(1年3回、2年2回、3年1回)及び保護者対象進路講演会(1・2年1回、3年2回)を開催した。 檀高大学を、例年どおり9月下旬の土曜日に実施したが、公欠者が多数出た。 自己分析と適性(職業・学問)理解に基づいて主体的に自己実現を図る契機として、1年で「学びみらいPASS」を導入した。 インターンシップ及び一日看護体験参加を広く呼びかけた。 学習習慣・方法を振り返り記録する方途として、1年でポートフォリオ(紙媒体)を導入した。	1・2年の進路学習を、1年間をとおしてバランスよく実施し、3年間を見通して内容を設定する。 進路講演会(生徒・保護者)を、求められる学力、高大接続改革等を含めて、よりタイムリーな内容で開催する。 檀高大学の実施時期を再検討する。 生徒に、部活動や学校行事等での自己の活動を記録(ポートフォリオ)に残すよう働きかける。 高大接続改革、Japan-e-Portfolio等についての研修を行い、教員間での共通理解を図る。	
(5) 人権教育	人権教育ホームルーム及び人権講演会の内容を充実させ、多様な人々の思いや願いを理解するとともに、自分の命も他人の命も大切にできる生徒を育てる。	参加体験型のホームルームを継続して実施するとともに、障害者に関する人権講演会を開催し、生徒の人権意識をさらに向上させる。11月実施の「3年人権学習アンケート」で肯定的な回答をした生徒数の合計が全体の75%以上であればA、50%未満でC。	A	年間計画通りに1年で車いす体験、2年で性の多様性とひと・まち・くらし、3年で統一用紙趣旨違反質問への対応などの参加体験型ホームルームを実施できた。奈佐誠司さんの人権講演会「ダンスで心のバリアフリーを」も生徒に好評であった。3年人権学習アンケートで肯定的な回答をした生徒の割合が76%であった。	人権ホームルームをより充実させるため、1年で担任主導で展開できる時間を増やし、3年で在日外国人についての内容を取り入れる。2回にまたがるテーマは間隔があきすぎないように実施する。校内人権作文の代表作品を今月の言葉に掲載する。	各家庭、生徒の意識が多様化してきており、より細やかな配慮が求められているように感じる。引き続き指導をお願いしたい。
	教職員の校内・校外での研修の機会と内容の充実を図り、それらを積極的に利用して人権感覚を磨き、生徒への指導に生かせるように努める。	校内研修は、全体研修を年1回、学年研修を各学期1~2回実施する。校外研修は、PTAと共催で現地研修を年1回実施、高人教等の外部団体主催の研修に積極的に参加する。以上の研修をすべて実施できればB以上、現地研修に教員が15名以上参加できればA。	B	校内全体研修は、5月に校長を講師に「人権について考えてきたこと」をテーマに実施した。学年研修は、人権ホームルーム実施前に毎回実施した。校外研修では、PTAと共催で8月に神戸の「人と防災未来センター」と南京町を訪れ、教員は11名が参加した。高人教等の研修には積極的に参加できた。	教員の参加が少ない現地研修をとりやめ、8月に全体研修を実施する。テーマについては、より身近でタイムリーなものを選定する。	
(6) 文化図書教育	読書の習慣を身につけ、豊かな感性と教養を育む。	週2回(各15分)のSSR(持続的黙読)を軸に、読書の楽しさと意義を実感し、生涯にわたって本に親しむ習慣を育てる。年度末アンケートで「SSRについて」の全校平均満足ポイントが6.5ポイント以上でA、5.0ポイント以下でC。	B	生徒、教員ともにSSRを肯定的に受け止める声が増えて多く、特にSSRが朝の時間帯になってからは、1限目授業への良い影響も見受けられる。	「普段読まないのでも読む機会がないのでも」などを前提に「SSRはよかった」と述べる生徒も多く、読書の習慣化というには、まだまだ不十分である。室移動や教員の1時間目授業への対応も解消されてはならず、今後検討を続けていかなければならない。	SSRの取り組みを高く評価する。スマホ文化とでもいべき潮流がすでに小学生から広がっており、読書の重要性を啓発してほしい。
	文化活動を充実し、生徒の知性と創造力を育成する。	文化行事をとおして知的好奇心・創造力を育て、高校生としてふさわしい文化意識の獲得を目指す。学校全体の取組として、年間4回以上の文化行事等を実施でA、3回でB、2回以下でC。	A	若雉子祭(9月)、校内読書感想文コンクール(9月)、朗読を聴く会(10月)、図書館文化講座(11月・2月)、校内読書感想画コンクール(12月)、百人一首かるた大会(1月)を実施した。いずれの行事も生徒の創造性や知的好奇心の伸長につながった。若雉子祭の展示製作物などに独自性が不十分なものもあり課題である。	著作権などのルールについては、実施要綱や委員会でも周知しているが、さらに丁寧な説明や、学習の機会を設けていく。	
(7) 体育健康教育	全生徒が、充実した高校生活を送れるよう、健康・安全教育を推進する。また、体力の向上を更に図る。	学校保健委員会を開き、生徒の健康・体力の状況について実情を精査し、改善を図る。また、健康便り、食育通信の発行により、生徒個々の健康に関する意識を高める。体力テストの結果において、各学年男女別で全国平均を10項目以上上回った場合A、3項目以下の場合C。	B	健康便り(ほけんだより)を月1回発行し、生徒自身の健康に関する知識及び自己管理していくための情報提供に努めた。 体力テストにおいては、立ち幅跳び・長座体前屈・握力で各学年全国平均を下回る結果となり、瞬発力・柔軟性・筋力といった点で向上を図る必要がある。	近年、増加傾向にある種々のアレルギー疾患や健康維持に欠かすことのできない睡眠・栄養面での情報をより詳細に提供していく。 体力テストの結果を踏まえ、体育実技及び運動部活動においても全生徒の体力向上を図れるようトレーニング法を工夫していく。	体力テストの結果は、平均に比べて極端な下回りではないとのことだが、生徒の体力向上のための取り組みを期待する。
	保健体育行事において、生徒が主体的かつ主体的に参加できるように工夫する。	檀高生活アンケートの球技大会・体育大会・クロスカントリー大会の3項目について、満足度が80%を超えればA、50%以下ならC。	B	体育大会が、午前中で降雨中止となり、後日後半を学校実施とした。競技が制限される中ではあったが、生徒の積極的活動がなされた。	各体育行事を、今後も生徒がより意欲的に取り組めるよう企画・運営の充実を生徒会・体育委員会協力のもと図っていきたい。	

(8) 環境整備 防災教育	学習に専念できるよう、生徒が自分たちの手で校内の美化ができる姿勢を養う。	「汚さない、ゴミを出さない」指導を行い、日常の清掃活動をおして生徒の美化意識を高める。生徒アンケートの校内美化の取組状況で達成度6.0ポイント以上でA、5.0ポイント以下でC。	B	A	85%以上保護者が環境美化、清掃が十分できていると評価している。大掃除では、まず身の回り（私物、机、椅子、ロッカー）の整理から始めるよう計画したが、日頃から整理をする習慣へつなげることができない生徒もいた。	清掃の重点目標の設定、ゴミの減量、身近な環境の整備、通学路の美化、公共の場所でのマナー遵守指導。「ゴミを出さない」「汚さない」「放置しない」の継続した指導の徹底。環境整備委員会活動の継続。	避難訓練を見学したが、いい経験だった。地域には3,000人以上の高齢者がいることをふまえて、樞高生が果たすことができる役割も大きい。平日の災害を想定した訓練をすすめてほしい。
	震災、火災等に備えるための避難訓練などをおして自らの身を守る行動の習得と防災に対する意識を高める。	生徒の防災意識を高める避難訓練を実施し、自らの身を守る行動を身につけるとともに、各教科においても機会あるごとに防災意識を高める取組を行う。生徒アンケートで「防災について理解できた」が70%以上でA、50%以上でB、50%未満でC。	A		防災訓練では、地震を想定して行い、避難経路の安全確認、地震発生直後の防御姿勢に重点をおいた。実際の避難では、周囲の状況を的確に把握し、適切な場所への避難が求められる。また、地域の住民の方にも防災の呼びかけを行い、協力を得ることができた。	日頃からの防災意識を高めるため、年2回の地震発生時における身を守る実践訓練に加えて、あらゆる機会を使って防災、減災に向けた呼びかけを行っていく。	
(9) 学校評価 広報	本校独自の教育内容の構築に努めるため、学校評価のシステムを検討し実施する。	生徒による授業アンケートを年2回、学校アンケートを年1回。保護者によるアンケートを年1回実施し、集約結果を報告する。あわせて学校評議員による外部評価を実施する。	A	A	授業アンケートは1学期末と2学期末に同じ質問項目で実施し、データの変化を比較することができた。各アンケートの集約結果は自己評価、外部評価の資料として利用した。	これまでのアンケート結果を精査し、顕著な違いが現れるものについて原因を明らかにし、改善すべき点については具体策を検討すること。	学校評議員の役割の一つとして、地域と学校との連携をはかることがあると考える。お互いに意見を交わしながら、よりよい関係を築いていきたい。
	中学生への広報活動を積極的に行う。	中学校や塾に積極的に訪問し、広報活動に努める。より多くの中学生が本校を志望するよう広報内容の改善に努めるとともに、学校ホームページの改善・充実に努める。12月末までに学校ホームページの移行作業が完了すればA、70%未満であればC。	A		訪問中学校数60、進学説明会への参加数10であった。保護者アンケートの結果より、「ホームページを見る」との回答が3年前と比較して9.9ポイント増加した。	中学生、保護者が必要とする情報を的確に把握すること。ホームページの内容をできるだけ最新の状態で維持するための方策を検討すること。	
(10) 国際理解 教育	国際理解教育の推進を図る。	ホームルーム・集会で国際理解に役立つ内容を扱う。外国の事情や外国人が日本をどのように見ているのかについて関心を高めることができるように、新聞を3回以上発行する。3回以上でA、2回以下でB、0回でC。	A	A	外国の事情や外国人が日本や日本人をどのように見ているのかについて新聞を3回発行した。当初の目標は達成できたが、どれだけ多くの生徒たちがその新聞を読んだかについてはわからないので活用範囲が広がるような良い方法がないかについて検討したい。	新聞を国際理解のホームルーム等で活用できないかについて検討したい。	海外修学旅行は成果をあげており、いい取り組みだと思っているので、今後も続けてほしい。
	国際交流行事への参加促進と海外修学旅行の充実を図る。	海外研修・短期長期留学事業の紹介に努める。国際理解教育の視点にたち、海外への修学旅行が有意義になるように教育内容（総合学習）を検討し、実施する。海外修学旅行後のアンケート結果で満足度を調べる。75%以上の満足度でA、50%以上でB、50%未満でC。	A		海外修学旅行のアンケート結果によれば満足度は極めて高いものだった。昨年の反省点から今年度はBSプログラムの案内人を英語を母国語として話す人々に変更してもらったので生徒たちは英語で意思疎通を図ろうと努力できていた。多くの生徒が英語学習の重要性を感じたと思う。	生徒同士のプレゼント交換には何が良いのかや交流行事の内容について、今年度の修学旅行の反省点を踏まえて来年度に向けて改善をしていきたい。	

第1学年	高校生として、集団生活における自分の役割と存在を意識させ、責任ある行動ができる資質と能力を身に付けさせる。	日常生活において、挨拶の習慣と正しいマナーを身に付けさせる。学年の先生方の70%ができていると判断したらA。	A	A	A	大部分の生徒が出来ている。その反面、授業の開始時等においては、次第に礼や挨拶が雑になっている場面もある。	基本的な生活習慣や規範意識について、全体および個別で粘り強く指導を継続していく。	各生徒が、樫原高校に入学すると何が出来るようになるかを考えさせ、その目標達成に向け意欲向上をはからせてほしい。
		日々の授業を大切に、予習・復習・課題提出などを確実に実行させる。平日の総学習時間が1時間以上とする生徒が70%でA。	B			授業を大切にに取り組んでいる生徒が多い。調査前の学習に限られた生徒が多く、予習、復習の習慣づけが課題である。	自己の目標を明確にし、何事にも主体的に取り組めるように指導していきたい。	
	人としての美しい心を養い、寛容の精神をもって人と接する姿を学ぶ。	人に対して思いやりのある行動ができる心を養う。自分にはない、他人の能力を認めることによって、お互いを尊重する心を養う。重点目標を達成しようと努力している生徒の数が70%でA。	A	A		クラスでの生活や部活動において助け合い、励まし合い、お互いに成長する言動や行動が見られた。	他者を理解し、思いやりのある態度や行動が自然に出せる生徒を育てていきたい。	
第2学年	『当たり前のこと当たり前になろう。』というスローガンのもと、すべての基礎となる生活習慣を身につけさせる。	日常の全ての機会において礼・あいさつの基本習慣を身につけさせる。学年の先生方の70%ができているでA。	A	A	A	学年所属教員の72.5%が、できていると評価している。しかし、他学年所属教員の中には、まだまだできていないという意見もある。	挨拶を生徒と一緒に学校全体で行い、当たり前のことを共有する。進路実現や家庭学習の定着を図るためにも、これまで以上に保護者と連携を図る必要がある。保護者会、三者面談などを通して、進路に関する考えの共有、最新情報の伝達をさらに充実させる。個々の意識だけでなく、学校全体で授業改善に取り組み、生徒により深い学びを提供し、主体的な学習を支援する。	2年生は、進路を自分のものとして考える大事な時期である。「何を学ぶのか」から「どのように学ぶのか」へ意識改革の定着をはかり、進路実現に向かうためのきめこまやかな取り組みを期待する。
		「予習・授業・復習」の習慣化と家庭学習による基礎学力の定着に取り組む。平日の総学習時間が1時間以上とする生徒が70%でA。	B			7月から12月にかけて、予習をしている割合が51.4→53.7%、復習をしている割合が54.7→56.6%へと増加している。能動的に授業に取り組む割合も54.8→62.1%、集中して授業に取り組む割合も80.7→84.4%と増加している（授業アンケート結果）。予習、復習については、増加したが、決して多数とはいえない数値であり、更に意識を高めさせていきたい。		
		模擬試験では、目標設定や結果の振り返りをし、高い目標を持ち、取り組むよう指導する。適切な時期に充実講座を設定する。模試のやり直しをしている生徒が70%でA。	A			模試の受け方や、やり直しの意識は高まっている。結果も、徐々に向上している。充実講座への出席率も高い。早い段階からセンター試験の問題を意識させるなどして、進路実現への意識を高める工夫をしている。		
		海外修学旅行に向けて、また将来グローバル社会で活躍できる人材を目指し、語学力を身につける。英語の模試の偏差値を前年度1ポイント上げてA。	A			修学旅行などの行事を通して語学力を身につけなければならぬという声が多数上がっていた。必要性に駆られて学習するものが増えて偏差値を1ポイント以上上げることができた。今後、この雰囲気でもって学習させたい。		
	生きる力、豊かな感性を磨く。	基本的なことは当たり前ででき、中堅学年として「樫高生」の手本となるよう自覚を促す。重点目標を達成しようと努力している生徒の数が70%でA。	B			A		
	部活動や修学旅行、体育大会、若雉子祭などの学校行事を通じて、思いやりとお互いを尊重する心を養う。学校行事の満足度が10点満点の7以上でA。	A		クラスメイトと良い関係を持ち、協力して学校行事に臨むことができている。特に修学旅行での集団生活や、学校交流等を通じて、自分の行動だけでなく、周囲を気遣い、相手の気持ちを考えて行動することができた。				
第3学年	進路実現に向け、基礎学力を確実に身につけ、実践力の習得に結びつける。	DS、LHR、学年集会、個人面談、各種講演会等を通して自分の進路をしっかりと意識させ、自ら主体的に計画を立て、粘り強く取り組む気持ちをもたせる。学年所属の教員の70%ができていると判断すればA。	A	A	A	大多数の生徒たちが、進路実現のため真剣に取り組んだ。一部の生徒で、学力の伸び悩みや保護者との意思疎通不足のため、目標を見失いそうになる生徒もいたが、担当が中心となってきめ細かな対応をすることができた。	保護者には最新で適切な進路情報提供を心がけてきたが、まだまだ不十分と考える保護者が約2割いる。成績郵送時や三者面談などの機会をとらえて、保護者の手元に確実に届くような工夫が必要である。また、アンケート結果より47.1%が塾・予備校を利用して、定期調査対策をしている。このような実態を踏まえ各授業や充実講座の内容、展開方法を検討する必要がある。	卒業時のアンケートで生徒、保護者とも満足度の数値が高いと聞き、これまでの取り組みに対して敬意を表する。社会の急激な変化にも対応でき、誇りを持って生きることができる人に育つよう、生徒の育成をお願いしたい。
		本人及び保護者の理解と協力を得られるよう進路指導部と連携をはかりながら講演会等を計画し、進路・学年通信を定期的に発行する。また、丁寧な三者面談を心がける。学年所属の教員の70%ができていると判断すればA。	A			進路指導に関する講演会を5回(生徒対象3回、保護者対象2回)実施、進路・学年便りの発行の際には趣旨を理解した上で活用できるように促した。保護者の84.0%が情報提供に満足している。		
		授業、充実講座、定期調査、模擬試験等を通して、基礎から発展的応用力、実践的な学力が身につくよう指導する。定期調査30%以上かつ模試70%以上の割合で生徒が効果的に学習活用していればA。	B			定期調査及び模擬試験の結果を十二分に意識し、本校生の進路実態を踏まえた内容(定期調査34.2%、模試56.0%)の各授業・充実講座の展開の仕方を検討、工夫した。		
	遅刻欠席を少なくし、規律正しい生活の実践を指導する。進路実現について、互いに励まし合う雰囲気作りを行う。本校の教育方針を理解し、重点目標を達成しようと努力している生徒の割合が70%以上でA。	B	11月以降、出席率の低下が見られた。HRや学年集会を通して、また家庭との連絡を密にとって改善をはかったが、受験など進路実現するための不安からか、一部の生徒の欠席数が極端に増えた。					
人間力の向上	最終学年として何事にも主体的に取り組むことで、公共心、規範意識の向上、他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力、自分らしい生き方を追求する力を養い、自立した一人の人間として、総合的な力が身につくよう指導する。	A	B	行事については、クラス全体が一致団結して、お互いを認め高め合いながら、協力して取り組むことができた。最終学年として、部活動は体育・文化系共に後輩たちの手本となり、リーダーシップを発揮しながら部全体をまとめ、最後まで熱心に取り組むことができた。	ほとんどの生徒たち及び保護者が、進路実現について不安をもっている。教員側から、生徒の家庭環境を含め、人間関係の実態を把握した上で、前向きな声かけや励ましをする。また保護者と連携を深めていく。			